



注 意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す。治安と風保とを害し又は人身攻撃に渡らざる限奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

鐵道踏切に渦まぐ 足地獄

二臺の自動車に分乗した一行が岐阜縣今須の東海道鐵道踏切に於て上り特急の爲前車と後車とを遮斷せられ前車の行衛を詮索する爲めに困難を感じたことがあつたが、大朝紙上に次の記事があるを見た。

「春は旅から」寒くなく暑くなく櫻咲く春は一年中での旅行シーズンだ、温泉に、遊山に、神詣でに人々の足が思はず浮き立つ、足、足、足を乗せて走る汽車が、電車が船がいくら増發しても足りない、ところがこの足がどんなに多數集らうと運びやうのない、足地獄が戸畑では名物になつてお

る。舊市街の東側を走る九州本線の（踏切切替線でもある）がそれで行樂の春、殖える足の始末には事故防止のためとはいへ市および驛當局もさることながら足の所有者自身が困る。近時裏戸畑驛の開設が叫ばれてゐるが、貨物驛として全國でも屈指の同驛だ、部分的なこの改造論も足を運ぶ解決策とはなりさうもない。貨車の切替作業などの場合長いときは十五分も立ん坊させられる踏切が二ヶ所もあるのだから、市場歸りの奥さん連など地團駄踏んで口惜しがるのも無理はない。

だからこのポールがたびあがると決潰した堤防のやうに無数の足が、同じやうにストツプを食つてゐたバス、馬車、自轉車

オートバイ三輪車などの間を縫つて走るやうに氣忙しく運ばれその混雜つたらぬ。増發のきかないこれは戸畑に見る春の異風景と平面交叉の不便不安は何時解消されるか。

鐵道踏切の自動車

事故は誰の罪ぞ

鐵道省運輸局の取調によると昭和元年を百とし事故件數死傷人員數、自動車一萬臺に付ての事故件數の表示を見ると昭和元年（事故件數一六四、死傷人員二五七人、自動車一萬臺に對する事故件數の比率四一〇〇）に對し昭和五年では事故件數三五二、で死率二一五、死傷人員四六三人で比率一八〇、

自動車一萬臺に對し三九・七で比率三九・七昭和十二年では事故件數三九二で比率二三三九、九死傷人員五一九で比率二〇二、自動車一萬臺に對し二六・五で比率六五である。即ち知るクロツシキングの改造も年々施工して事故の發生を防止するの策を講じないのではないが鐵道と道路との平面交叉がまだ一敷へ切れぬ程あつて自動車の數は急激に増加し運轉手は不注意、勝ち乗客は無理押しかの要求をする、鐵道は速度を早める、機關手や車掌は低下する、事故も亦已むを得ないであらうが、とにもかくにも戦慄すべき悲惨事である、護國の鬼にもなり得ない鐵道事故に依る死者の亡靈は何處にかさまよへるや、鐵道と道路の立體的交叉の設備を勵行せられては如何。

飯櫃は引受けたと増

産米の秘訣を談す

長期建設も腹がすいてはと和歌山縣伊都郡妙寺町篤農家望月徳三郎氏は過去、二十

四ヶ年間連続反當り平均三石八斗六升といふ素晴らしい收穫をあげてゐる米作の秘訣を今同町内の米増産計畫部落懇談會で披露して町民に感動を與へ来る蒔種期から指導督勵に當ることになつた。米作秘訣の概要次の通り、

籾種子は青田の中に病蟲害が少く風雨に堪ゆる草丈の短い千本旭類の品種を選び通風のよいところに貯藏する、苗代の整地は二月ごろ耕し寒さらしにして排水は一齊になるやうに心掛け播種量は坪當り三合、肥料は蹄角骨粉を五合乃至七合を施し、發芽の一齊を計るため干水は播種後十日目に、苗を丈夫にするため三、四回芽子を行ひ、本田整地は一般より早く肥料は大豆粕を用ひ全量の三分の二を植付前に施し、植付は湧水箇所は抜堀にして避け水口と低いところへは太い苗を植付け二番草と三番草の間に追肥残り(三分の一を施し)四番草が終つてから水を落して小龜裂の生じるところまで干し穂孕期前に硫酸ダンモニヤを反當り二

貫五百匁乃至三貫くらゐ施し蒔取りは穂二分拵れたころにする。

ボツカリ國道トンネル

ルガ口をあいたら

門司から下關へ下關から門司へ、源平海戦のあつた海底の下を歩つて通れる國道豆トンネルはま近く抜ける、又近く本トンネルも續いて抜かれるそこで門司でも下關でも國道トンネルがボツカリ口を開いて自動車や自轉車やオートバイは勿論男女老幼の人間を吞吐することとなるのである、門司の方面で見ると、入船町七丁目と養榮町一丁目交叉點のトンネル出入口は自轉車を除いた車馬だけで通行人と自轉車は門司市が十四年度から二ヶ年繼續事業で着手する和布刈公園道路を通つて現在の堅坑の地點でストツブ、エレベーターで國道トンネルの坑底に昇降して往來するとのことである。開いた口がふさがらない。

婦人の街頭運動は

肅清すべきか

國民精神總動員委員會で平沼老首相荒木文相等並び居る高位高官の前で女性醫學博士竹内茂代女史をして「單に婦人を街頭に引つ張り出すばかりでなく、もつと婦人が積極的に進んで此の運動に参加出来る様婦人の立場からも大いに考へて戴かねばなりません」と獅子吼せしめたとの事であるが花の日の運動や水火害救済運動や地震罹災者見舞運動などに黃塵萬丈の街頭にいたいたけな女學生をして右往左往する凡衆にものを乞はしむるの慣習は如何、此の街頭風景を見る毎に筆者は思はず眼險のあかくなるを禁じ得ないのである、婦人の街頭運動は歐米の飄蕩的ではあるまいか、肅清すべき問題なのであらう。

あるかなきかの珍

聞奇譚(25)

○水戸黃門の格さんの土佐行、寺石正路氏の研究によると水戸光圀卿は徳川家康公の末子中納言頼房卿の第二番目の男兒として出生し十六歳にして水戸三十五萬石の太守となつたものであるが、武藝は和田平助政勝に學び免許皆傳の腕前となり、學問は明の朱舜水を師とし和漢の書は勿論のこと神道佛説、天文地理、陰陽匡卜の類に通曉し明曆三年初めて大日本史の編纂を志し終に古今の名著を完成、六十一歳で家督を養子の中納言綱條公に譲られ元祿二年三月十五日隱居を願ひ出で西山公或は水隱海里と變名し、助さん格さんを供として各地を漫遊したといふのが浪花節や講談で親炙され到る處で當時威張り散らしてゐた殿様や悪代官を「天下の副將軍なるぞ」と鶴の一聲で叩まし柳生旅日記と共に胸のすくような漫遊記となつてゐるが、實際は

水戸黃門が漫遊したのではなく、家來を各地に遣はし、史料を蒐集せしめる旁ら民情を探らせたらしい。寺石氏の研究によると「助さん」といふのは大和の寺僧で本名宗澤が「佐々助三郎」と稱し畿内一圓を廻國させまた「格さん」は水戸藩士で藩中切つての學者牧野木工之助であつた。牧野は僧形となり自ら雪心と稱し四國の靈場を順拜したもので土佐へ來たのは元祿八九年の頃らしい、右につき寺石氏は語る。助さん格さんの片割れが土佐へ來たとの文獻は土佐にはないが、水戸史を研究してゐるうち偶然發見した次第である。牧野は雪心と稱し僧形となり、甲浦から土佐路に入り各靈場を廻り佐古の六日寺から一宮の善樂寺一宮から五合山の竹林寺を打ち城下には入らず十市の峯寺に到り仁井田、種崎を通り渡を渡つて長濱の雪溪寺に詣で秋山の種間寺に赴いたらしい、一介の雲水の姿であつたので一般の人々はこれが後日有名な格さんにならうとは誰も知らなかつたらう。